

仙台北三番丁教会

2023年12月24日 待降節第4主日

クリスマス記念主日礼拝

## 時は満ちた

代務牧師 齋藤 篤

新約聖書 ガラテヤの信徒への手紙4章4～7節

<sup>4</sup>しかし、時は満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。<sup>5</sup>それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。<sup>6</sup>あなたがたが子であることは、神が、「アツバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。<sup>7</sup>ですから、あなたはもはや7奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

新約聖書 ルカによる福音書2章15～17節

<sup>15</sup>天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。<sup>16</sup>そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。<sup>17</sup>その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。

©日本聖書協会『聖書 新共同訳』

---

時は満ちた。

ガラテヤにある、イエスをキリスト(救い主)であることを受け入れて信じた人々に対して、手紙の筆者である使徒パウロは、そう綴りました。確かに救い主は、私たちのもとにお生まれになられたのだと。ここから私たち人間の命を救う物語は始まったことを、私たちに改めて知らせるためでした。

救い主としてイエスがお生まれになられたということは、私たちに一体何をもたらすのでしょうか。生まれたばかりの赤子に、私たちを救う力など、どこにもありません。住民登録をするために、旅を続けていた最中でした。ゆっくり休むことのできない家畜小屋のなかで、彼はひっそりと生まれました。両親となるヨセフとマリアが経験した、さまざまなトラブルやアクシデントのなかで、赤子であるイエスは生まれたのでした。

しかし、非力とも思えるその赤ちゃんの誕生は、決して「普通の」ことではありませんでした。使徒パウロは、この出来事を「神は…」という書き出しで綴っています。「**神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。**」(ガラテヤ4章4節)。そう、この赤子は、神が女マリアを通して、私たちのもとに遣わされた存在であるという、私たちの信仰を明らかにされたのです。

パウロは、この赤ちゃんについて「**律法の下に生まれた者**」と表現しています。ここに、パウロが「ガラテヤの信徒への手紙」で、読み手に対して特に強調したかったことが、大変直接的な仕方で描かれています。それは「律法」という言葉であり、具体的には、イスラエル民族の父である神が、指導者モーセを通して人々に授けられた、旧約聖書出エジプト記・レビ記・民数記・申命記に書き記された律法という言葉でした。彼らは、神に選ばれたイスラエルの民として、この律法を守るという責任が与えられていたのです。

しかし、パウロは断言します。救い主イエスがお生まれになられ、ご自身の死といのちの復活を通して私たちの前に現れた以上、その律法を守る義務も必要も、理由もすべて無くなったのだと。イエスご自身が、律法を完璧に実現されたのだからと、読者に知らせたかったのです。

パウロという人は、律法という言葉に造詣が深く、その知識や解釈に長けていた人物と言われていました。律法学者から最高の学問を受けていました。律法の忠実な実践者、また専門家としてその反省を歩んでおりました。イエスが救い主など、とんでもない話だと、キリストの信仰者を迫害していた張本人こそ、パウロその人だったのです。

しかし、そのパウロは、まばゆく輝くイエスの前に倒れ、まさに死んだような状態のなかで、彼の声を聴いたのです。「**サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか**」(使徒言行録9章4節)と、幻に現れた救い主イエスは、のちにパウロと名を改めるひとりの迫害者サウルに語りかけます。そして、サウルは彼に導かれるままに、ダマスコの街に入り、人生の一大転換を経験することができたのです。

パウロは、確かに死にました。そして、再び新しい人生の誕生を迎えました。名前もサウルからパウロに改めました。そして、その時に彼は悟ったのです。「私は律法という言葉の数々から、解放されたのだ」と。以後、パウロは、律法の専門家という肩書を、何のためらいもなく捨てることができたのです。名誉ある彼の地位は、キリストを前にした今となっては、何の役にも立たないものなのだと、彼は悟ったのです。

しかし、彼が自分自身の名誉や地位を捨てたというのは、彼自身の「一大決心」の結果として、そうしたのはありませんでした。彼は、律法という言葉の束縛から解放されたからこそ、彼を縛り続けていたものから解き放たれたに過ぎなかったのです。自分を縛り上げているものが何であるかすら、彼は気付いていなかった。しかし、イエスに出会ったことによって、パウロは、これまで自分自身をがんじがらめにしているものが何であるかを、全て知ってしまったのです。

パウロは、そのことを「**奴隷**」(ガラテヤ4章7節)と言い表しています。つまり、主人を前にして、自由が決して利くことのない身分と、自分自身を重ね合わせながら語っているのです。パウロは、救い主イエスがマリアを通して、神から遣わされたのはどうしてかについて、こうも書き綴っています。「**それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。**」(同5節)

パウロは「律法の支配下」ということにこそ、私たち人間が「奴隷」であったことを思い起こさせようとしているのです。律法の支配を前に奴隷の状態であったイスラエルの民、ひいては私たちすべてのために、イエスは自分自身という身代金をもって、いのちの道へ救出をしてくださいました。そして、そのいのちの道は、父なる神に通じる道筋であり、こうして人々は奴隷ではなく、神の子どもとされたのだ。これこそ、パウロが伝えたかったことなのです。

さまざまな人生の辛さ苦しみを舐め尽くしながらも、命への道に導かれた人間が、イエスの助けによって実現しているのです。それは、イエスの父母であるヨセフとマリアが、わが子の誕生にいたるまでのドラマに込められた、実に多くの「冒険(アドヴェンチャー)」の道のりに重ね合わせることができるのかもしれませんが。そして、それはクリスマスにいたった、私たちの過ごしたアドヴェント(待降節)の日々にも、相通じると言えるのでしょ

う。ここに、私たちがあらゆる束縛から解放される物語が始まりました。しかし、まだ私たちは解放されていません。この世で生きることは、今をもってなおも、束縛から解放されていないということへの自覚を生み出すものであることに、間違いのないのです。人が人を縛り上げることによって自由を失わせ、また、自分自身をあらゆる面で縛り付けているがゆえに、本当の意味での解放を味わえないまま、大変不自由な人生というものをつくり上げているのも、私たち人間の現実と言えるのです。

束縛は、ゆがんだ支配を生み出します。ゆがんだ支配のあるところには、人間の幸福などありえないのです。戦争も、不正も、カルトも、何もかも、人間の平和のためと言いながらも、それが普遍的な万人のための平和の実現にいたることは絶対にあり得ません。多くの犠牲と苦しみを産むだけなのです。まさに、奴隷状態の世界に、私たちは身を置かなければならない。それが現実です。

だからこそ、イエスという救い主の誕生を祝いたいのです。ここから物語が始まったことに、私たちは心から期待と喜びをもって、あの馬小屋に向かいたいのです。「さあ、ベツレヘムへ行こう」(ルカ2章15節)と、駆け寄ったあの羊飼いたちのように、私たちは平和の実現者であるイエスに向かい、イエスとともに生きる道を、是非歩もうではありませんか!

主イエス・キリストの御降誕を、心からお祝い申し上げます。おめでとうございます。

---

## 祈り

私たちのために、奴隷からの縄目を解き放つ使命を持つものとしてお生まれになられたイエス・キリストの父なる神、時は満ちて、ここから救いの物語が始まりました。私たちが自由を受け取るために、解放者となられたイエスが、私たちとともに平和への道を歩んでくださることを感謝します。どうか、私たちにクリスマスの意味と喜びを、今一度思い起こさせ、知らせる者とさせていただきますようにお願いします。

クリスマスの主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。